雙玉傳

二

へ13
2898
8

文政三年庚辰七月版元に著
作者
播陽
宮田南北編次

長門文庫
四庫全書
尾定

近世雲晴間雙王傳第二輯巻之三
新話

第十五回　孤真と盡くして宇雛進退と極む

這時菊月中旬ふて。田舎ハ秋収の最中あるに。さすが都會の浪花津ハ。珍鋪見物繰。這里や那里ハ絶間なく。行龍ハ那日より。洞房ハのく旋びくて。少くく欝ハ遍りくれば。一日楽曲婦嫖慰五六人引ちて。四天王寺へ參詣せ。そが中ハ七草も。一際王花ハ飾りく。粋蒔ちくて従ふく。行竜ハ七草が説と関て。其身ハ姿と重圖ふて。さがすく知れば

昭和九年四月購求

へ 13
2898
8

見咎られざるやうふ〳〵。轎ふ乗て出るるが真ふ是今日
且那。花花美の遊客へ。既ふ天王寺の門近くあり〻。詣づる人
まち〳〵多く。詠めふあるぬそが中ふ。是も同く遊客めひて。
楽曲婦四五人引ぢれ〻。片肌と脱扇と振て。歌つ儛つ来る
者あり。近く成て行龍へ轎の中よりすく〳〵見るふ。豈計んや這遊客へ。
檜垣屋の楫五郎あり。行竜是へと駭きあぐ〻。やよ檜垣大人檜垣大
人と。二声三声よびそれば。楫五郎へ醉眼と。稍眙て酒氣芬々たる声
高やふ。云るるやう。何者あまたび途中ふ〻沢山そふふ我名をよぶや。
爰へ出よと呼それば。紫它二郎へ轎より。立出て顔見合されば。楫五
郎へ恂り〻ふ。あへ珍〻貴主。御身へ晋衛の玉樹屋ふ居るふと聞〻

ふ今日へ何處行るふと。問へ行竜打〻〻〻ひ。不題無案ある人なるうあ吾們
恁大勢ふ〻。這里まで〻〻來らべ云〻も知らき。四天王寺へ參詣せひで亦
何の所へう行べきや。和主へ什麼何處の宿ふ〻。何日這地へ來られ
〻と問べ楫五郎へ四下と見廻〻。小可當地へ出來り〻ん。種々ふ
説話あり。あへ途中ふ〻演ぐ〻〻。倖僥這里ふ善茶肆あり。奥
亭ふ〻譚り侍らん。時ふ拿て邪摩あるらんがまづあらま〻
と閲て〻らべとて。行竜と誘ふ〻。茶肆の内へまで〻入べ七草へ檜
垣屋の。楫五郎と閲ようも。原來へ吾子うあつ〻〻。と云んとせ〻
が衆人ふ。恥て口へ出〻〻〻つもぢ〻〻と控居ると。行竜早くも
其機と察〻。七草が耳ふうう。ふ声ふあつ〻云やう。我奥亭で手

と拍と。相圖となるて出られよ。それまでは次の房に忍んで
やうさと関をへと。密語べ七草は。点頭てこそたひ居こう。余程
に楫五郎は。行龍と相伴て楽曲婦等は皆次の間に。止めおきつ只
二人。奥亭に打通をべ。紅靺鞨の女ども。早拯盆と持出ると。楫
五郎霎時と止おき。不題行竜に中やう。嚮に御身に買こし。
刀の緯より云扮起り。小可は既に親船十郎に長き勘當と受
こうこう。首言其訳と。首畢関ねこ。一日親あり船十郎。小
可と迫く招き。你這回雌龍丸の名力と。大内家へ持参せこに。
那方さまのあつらへこ。そぐ拵と改よと。仰とうけてうて
こと。関こぐ刀は何處に置こうや。是へ見せよや云こうこれべ

楫五郎長應に。是非なこ刀と出ここう。船十郎は取あげつ拔
放こと遂と改。始の雌龍丸こ。鉈の味ひ異こて。龍のさ汚文
ちぐここう。いぐこやと危殆べ。楫五郎さここねは体こ。元よう
名こる名刀あまた。鉈の味も龍のさまも。かもここはそぐ名
刀の。寄特とそこに顕せこ。間違あこ親の眼と。こまず間
に合云られべ。船十郎大に怒り。胡論あり你が一言。加旃心得ぬと。
いつぐやの侍へ。凍まぐ二十未満に。乳の香の去らぬ後生うと
へ色く君子顔に。刀の目貫者あこ云こうる事も。吾甚胡
論に思へう。やよ擢六。此名刀と目貫者に。見せて真偽と正せよ
と。烈こと主命擢六は。即時に目貫者へ持て行。真拔偽拔こ

花はまだ蕾を開かざるもあり
浮世草子
青樓
屋行龍刊

せられば。目貫者是と遂と見て。ちゝ疑ひもあるき雄龍丸あり。二千金の價あり況や今時戦国の世の中誰ら是を愛ぜらん音ふ希代の名刀ありと。くふば權六直さま家ふ立入り。慇々と云られば。船十郎大ふ怒り。原来ハ你ぞユフ〳〵。這名刀と雌竜丸と。賣易ちつと欲合点ゆゑず。それの〳〵あるとで。先去日澤家の鼓子花ぞ。你ぞつひ果せ〳〵て。黄金二千金我よりゝ借〳〵。〳〵以て合点ゆゑず。絆包ぞふ首状せよ。詐ゲ云ば辛き目見せんと。罵り責まば揖五郎も。今ハ包ふてくぐ〳〵。嚮う福原の茶屋ふ歌客。女賊の為ふ雌龍丸と。欺き拿れ其後池垣音ぞ持し。雄龍丸の名刀と。三千金ふ〳〵求〳〵支と。遣もあ〳〵云ス

られば。船十郎是と閉より。勃然〳〵て大ふ怒り。即時ふ揖五郎と勘當し。渾家鼓子花と召寄て。罵り〳〵ゆゆ。汝いろ〳〵れた吾ふハ〳〵〳〵。恁穀盗の躰奴と。かぐ〳〵〳〵駄の金銀と。遣せ〳〵きつと安〳〵〳〵。いよ〳〵那名刀ハ。三千金ふ買〳〵ろと。問ハ鼓子花大ふ恐れ。那名刀ハ三千金の。約束ゆ〳〵。今早一千一百金と遣〳〵置いあり。登餘一千九百金ハ。いまゞ那手ふ遣よ〳〵ゆさず。跡より遣ふん約束ありと。云ば船十郎まず〳〵怒り。即時ふ一千九百両と。番僕隷擢六ふ持せつ。早速ふ浪花ふ遣し。原來擅垣屋ふ跡督ハ妹小舟ふ養子〳〵て家と根強ふ立入とく。妹の小舟といふハ。今茲僅ふ十一歳。鼓子花ぞ生所ふ〳〵。揖五郎ちハ庶母の妹ふあり。

鼓子花ハ大ふ嘆き。義理ある兄を勘當し。吾淋ぶ生ぶ妹小舟ふ。這家の名督拿しとハ。世上の義理ぶ立ぶ〳〵。女ふ迷ふハ漢子のあ〳〵ハ。知てや弱き揖五郎。そんあり丹の支あり〳〵。今一度思ひ直し。御了見あるべう〳〵。さまぐふ諫めども。永十郎ハさ〳〵ふ聽ず。亦許べうもあ〳〵ざれば。鼓子花大ふ哭き悲し〳〵。悄地ふ圓金三百金と。揖五郎ふ与へ〳〵ふやう。ちハ是吾淋が老爺ふ隠し。悄々地ふ集し黄金ふく。妹小舟ぶ嫁入の。天窓簪笄の料ふせんと。貯へおき〳〵金あるべど。是と和主ふ拿さとあり。あの禍ふ老爺の立腹尋常ふ〳〵ハ恕しハあるまひ。是を要時の日費やし〳〵老爺の怒ふ解るまぐ。何国ふあ〳〵も待て居よ。吾まと徒三

さ〳〵やりてん。必ず短氣と出さるべし。母の言のあり〳〵とうれば涙と共ふ三百金と。受〳〵這地へ出〳〵來ン。原元交結の楽曲茂あり郎其名と弥生と呼り。早其日より今日ふ至りて。百五十余金を果し。嚢中半ふ及び〳〵。這身の果と洞査あるべと。醉眼ふ涙を流し。伏〳〵る有さまハ哭酒好ふやあらんぞ〳〵ん。行龍首終打聽〳〵。そハ氣の毒ふ至り有り。嚮ふ刀の跡金と。擢六とやうぶ持來し時言下ふ怒と含し体。心得ざり〳〵思ひふ。恁る綽ふ〳〵有〳〵や。吾今和主ふ合さべき。最大切の人〳〵あり〳〵。手と拍ぶ〳〵す支二ッ三ッふ及び〳〵時陽亮とさ〳〵おし開〳〵一人の女入來る。且見まぐ年齢三十八九。四十まぐこのこと

けあり。盛ハ少〻過るれども。色艶ふ〻て桃の媚。尚あちこち
ふ残りて。揖五郎ハ見るよりも。あハ何人ぞ。まるゆ〻しん。
小可今まぐ見〻事あり〻。ぷくべ行竜打〻ひ。信ハ和主が
生の母。七草主ふ〻有あり。とぷくべ七草傍ふより。やよ揖五郎
欠あつ〻やと。淫蕩の心ふも。子の可愛さふハ塩ち神の。最
切あり〻ぞ見へふる。揖五郎も醉中あり。母と閑より心の内。
喜ぶと大〻とあり。そも〻甚麽ある故ふ。恁ハ流浪と
あ〻ふと。問べ七草たゞちよう。緯恁々と遺もあり。譚話し
て尚かふ〻と。行末まぐもかゝもちられば揖五郎も今さら
又涙とゞ流〻る。不題あるべきふあ〻ざれば。愁嘆の色直し

〻。おぐ〻酒肴を取合〻。弥生とえぐ的其餘の曲楽妓等。皆一所
ふ打集へ大ふ酒宴をえぐやる。其日も暮の近くあるべ。紫它二
郎ハ天王寺へ詣る間揖五郎們へ待ており。程あり。行竜詣帰し
うべ。打連ぐちく揖五郎們。揖取直を酒船の尻ふ帆うけて道といそ
ぎ。晋街へあそ〻る這時〻も行龍ハ肩の窒の甚〻〻堪
べふもあ〻ざるべ即時ふ按摩と傭る。ふあハ此頃より始く
あり〻〻。女按摩來る。且見れば年齢四九ふ近く。姿形大
ふ〻て血色強く。弱可き者と按僚〻あべ。撚り殺すべき勢ひ
あり。行竜ハ那女とよく〻見るふ〻ハ什麽ふ嚮ふ王卒ち因
と結び〻。賊婦宇薙あり〻るべ。互ふ顔を見合〻て是ハ〻

と驚きそうり。登岩宇雄ハ座とさぐり。行竜ふ向くいとゝ。吾済
嚮ふ曾寧村ふく。君ふ別ミヤせ〜のち。灰ふ閉バ巽といふ。年まゞ
若き女賊ありて。勅使偽り。三木殿別所家をいとへ窺ひ寄り。天神山の
大虻ゞ頭ふあ〜〜玉を棄ひ拿り。逃去ぶうと聴〜〜ふ登岩
刀倅ふも那女賊と。比良田とやうふく饗應の。時ふ面會〜ふひ
と人の語を聴侍ミう。それよりハ甚麽ふ〜て。這地へハ來ふひ
〜と。問バ行竜小声ふあうく。一首一畢を遺もふく。中ふハ少〜
空言も交へ賢ぶいて説聞ミれバ。宇雄ハ始終閲毎ふ。賛賞
せゞといふ事ふ〜。登岩行竜宇雄ふ問やう。倅いたゞぞや曾寧
村ふく。某乙ふ別ミ〜ようふ何地へゞ至り〜ぞ。又何呼以ふ這地

へ來ふ。接僚ふハ〜〜ぞ。巨細を語ミ徒然ゞて〜。徐りと聴ん
と問かくまバ。宇雄ハ襟を搔合〜。吾済嚮ふ刀倅ふ別ミ〜ようく。
一所不住の身のうへハれバ。何国を當行ふきをもうう。備前美
作等の国々を続う。豪家を見ていハ夜盗ふ入。拿てハ果〜果〜て
ハ。亦拿掠次第の奔流。黄金ふハ毫ふも不巡ふく。這浪花まゞ來
りしゞ。或人ありて不問譚ふ。吾済ふ向つ〜ヤやう。まゞ聴ふハず
や。這回播州三木殿別所家の藩中ふ。蛟倉紫巳二郎行竜と喚做
者ふあう。那怪き術を行ひ。三木殿の玉を棄へり。亦一名ハ女ふて。そ
ゞ名を巽と喚做せう。ふもまゝ不測の女賊ふく。怪き術を行
ふ者ふう。今這両名を一名ふうとも訴へ出る者ふ〜ハ。賞錢ハ白

銀百枚あり。まづ〳〵そこ属下の視ヲ。鯨江濡九郎といふ者あり。
ちも見付次第訪へ出べし。賞銭ハ各々差別あり。見ん人是が繪
圖あり。て。打ひらき〳〵見せ。れば。不題ハ我魁主紫它二郎主
と。恁まく〳〵堅〳〵尋ぬるや。甚麽那人ハ何国ニ居ぬ。遇あべきの
支告ヤさん非除這絆知りぬふとも。我志ハ届くべし。嗚呼恁あり
と思案〳〵。上野ある白井ハ元より。吾古郷ニ有あれば。一まづ上野
へ立うり。武蔵の江戸へも立越あべ。亦那人ニ遇縛りやと。思ひふれ
べ今朝より〳〵て。發逆旅と思ひ〳〵呪。今朝ちら〳〵すも刀你の這
里ニ。居ぬふ体を門辺より。後姿ニ見付ぬ。此人を〳〵紫它二
郎主あり〳〵大支を告ぬふ。最早〳〵。非除其人あり〳〵すとも。掬

巷の美境も知ら〳〵有。思ひふれべ女按僚と。姿と僕〳〵入竜〳〵ふ。吾料
の猜眼空〳〵〳〵で。紫它二郎主であり〳〵ふよ。早く這地と立去り
ぬ。今東国大ひふ乱れ両上杉の威望衰へ北条ハ相模ふより。佐竹ハ
常陸ニ治と構へ。里見ハ安房武田ハ甲斐。今川ハ駿河長尾ハ越後葦
名ハ奥州會津ニあり。て。那地の合戦止絆あり〳〵。恁まべ御身と尋る
者。希ふ一個も有べ〳〵ず。吾も東へ帰んと思ふ折こそ倖ひなれ。
御供伴〳〵て。参るべ〳〵。最信誠て勧ふれば。行竜寛尓と打笑
ひ首と右り左ニ掉。繪圖と以用て。某乙と。詮穿あすといふ支々。
遂此噂と聴ふれど。吾さ〳〵ふ恐まと〳〵ぬ。今要時這地ニ止り。又
関東へ下るべ〳〵。某乙今茲十七歳自ふ〳〵ハ烏許あれども。體人並ふ

大ゐ〜て。髻ハ似あた〜かゝゐ。ちゝ〜べさの額髪と。剃落さゞ
まゝと人ゐ怪まゝ〜絆おうゝべ〜。ゐぶ心既ゐ決せゝ。いそ〜と右
手をうけ〜引出す額髪と。そやくもちさゝ落〜ゝゝ。宇雑
悠と見るゝゝも。出來〜ゝゝ〜それであそ。人の怪む夏あ〜ゞ。
小可幸ゐ月額と。剃夏と郊ひ得〜ゝゝ。さゝべ全剃あ〜てんと。主
ゐ九ゐ〜剃刀と拿來ゝ〜紫它二郎ぶ。額髪と剃落せべ。天晴一個
の好男子と。見〜ゞゐだゝゝゐ成ゝ〜ゝる

第十六回　拥花と開〜て駿倉騣兵と戦ふ

登岩紫它二郎行竜ハ。元服の祝ゝて。蘋とたゞ〜め七草宇雑揖
五郎其外妻〜の人を集へゝ。大ゐ酒宴とたゞ〜めゝゝるぶ登夜も

〜〜〜更行て。各々臣閨ゐ入ゐゝゝ。不題是よりも行竜ハ。ますゝ〜
蘋ぶ艶色ゐ愛で。七草ゐハ見向もせず。邂逅七草ハ遇時ハ病氣有
〜て身と背け。那ぶ心ゐ從ハぢ。七草ハ是よりも心の内大ゐ恨ミ。
あハ皆那蘋ぶ。吾濟と詭〜〜恋人ゐ悪く云あすをのあるべし。
それの〜あ〜で紫它二郎も吾と最々嫌ゐゐ似〜ゝ。漢子の心ゐ
浮薄ゐる。ゝのむ甲斐あき美言の。〜〜の志〜〜もゝゝりあき。心
と知らぶ悠まで。ゐ〜ゐ〜あき夏と得ぢ知らね。主の心ぞ恐ゆ〜れ
と。獨朐の〜焦〜ゝる。揖五郎ハ鼓子花より。悄々地ゐ賜〜三百
金と。早七八分ゐ遣ひ果〜。嚢中淋〜〜成ゝれべ。心の内嬉まず一日
母の七草ゐ。絆悠々と譚りゝ。身の行末と議するゐ。七草悄々

地ふ告ていふやう。開方はいまゝ知どもやあり久ん。那池垣貢とあ
る壯俊へ。原播磨ふくそゞ本名は。鮫倉紫它二郎と喚做しゝ。大罪あ
り互擦捉あり。那と上へ告訴せべ。白銀百枚と賜ゝるゝや。利と見く
為ざるゝ勇あり〜。恁る互擦捉と交つ〜。連累の罪と蒙むべ。後悔
其處ふたちゞとかゝん。是と告訴すゝ時べ。禍反て福とあり。凶反く
吉とあるべ〜。權略あれは丈夫ふ〜ぞと自狐疑する絆と止て。早く訴
人ふ出よう〜と言巧ふ喚べ。楫五郎は大ふ愕き。そゝ耳新しゝを聊嘲
と閲ものゝ。那壯俊は池垣貢とつふ人ふく。舩あき武士と。思〜
ふ絆引うゝ。大罪人ふ〜あゝんとゝん。這ぞ天吾をゝて。不測の福と
授ふ。妙珍不圖の方便あり。いざゝや這度告訴〜て。賞錢を拿人隱

呉〜や。母刀自は什麼ふ〜て。那が互擦捉ある度と。〜
〜やと。問べ七草打笑て。是ふは段々因ある度あり。今さゝ問く
何ふゝせん。早く告訴ふ出よう〜。遲々〜て鮫倉逃去べ。顯の飯と拂ひ
落〜手中の玉と失ふゝう。尚も本意あき度あるべ〜。心得ゝうやし
母と子が。欲の近道恋の意趣。母子は尚もかふゝ〜と。示〜合〜ふ点頭
つゝぶ訴へゝうは恁々すべ〜。賞錢は必ず先錢ふすべ〜。万端忽滑絆
忽れと談合た〜て分れゝる。原來楫五郎が歌客家は。王樹屋と
軒並ふ〜そぶ名と出津屋と喚做せり。不題楫五郎は身拵へ〜。
速ふ這地の眼代堅隅隱岐介久厚の廳所へぞ出〜ゝう。登皆眼
代堅隅久厚が用僚ある。浮木亀太夫。玄関まで出來〜ゝ楫五郎

が訪へ出〳〵文書とり〳〵。眼代堅隅隠岐介ふさ〳〵ゆうが久厚開て是と見るふ先頃播磨三木殿別所家といふへ入篭〳〵女賊と同罪あり。蛟倉紫它二郎とヤ者人目を忍んで當地あり。晋街の玉樹屋〳〵止宿せり。這回公廳より禁〳〵き穿議あり。早速届け出る者へ。冀ハ褒賞白銀一百枚とすゝうて。告訴の賞ふ預り〳〵ゆあり。仰ぐ所憲勅ふあり。狀訴仍て件の如し。誠惶誠恐〳〵ぞ書〳〵る。是ふよつて堅隅隠岐介諸役僚を聚合〳〵貪議あり。首言揖五郎ふハ賊人全く捕へ得るまで。廳所ふ止置るふ〳〵あり。原來あ那と擇つ。浮木亀太夫と揖捕使とさゞめ。騣兵二百人を授て晋街へ向〳〵む。尤那行龍へ十七末滿の壯佼あまど。尤元放

幻術あり〳〵と聞り。かまへ〳〵拿逃と夏勿まゝ〳〵あり。浮木亀太夫ハ。猛可ふ驍兵と召集へ下知と傳へ〳〵ヤ〳〵。偖大勢一時ふ責寄あべ。賊人風と喰ふ〳〵。逃去んも測うゞ〳〵し。彼達ハ四方ふ分れ晋街の出口と塞よ。吾自小勢と引〳〵玉樹屋と責囲ミ。忽地賊と擒ふすべし。と。百七十人と残〳〵て四方へ配り。自三十余名と引つゝ。玉樹屋へあゝて發向す。玉樹屋方ふハ亭主とゞめ。這緯知るものゝ〳〵に〳〵。蛟倉紫它二郎へ。蘋大夫と只二個酒燕〳〵て居〳〵ふ行竜ゞ首ふうけ〳〵う。錦嚢中頃りふ鳴て。声と收る雷のゞ〳〵行竜〳〵と打嚇けべ。蘋太夫も大ふ愕き。〳〵何夏と立さゞと。行竜拿て膝ふ引布。錦の嚢と拿出し。佶と見詰てアラ不測や。

是這玉紫它雌ゞ精魂吾一世の守り本尊といひつべし。さるに這玉おのづから嚢中ゟく鳴るへ。善欤悪欤吉欤凶欤何ふも せよ不測の珍事と。這里ふ首て見る夏やと霎時ハ白眼尽くろう。登岩外の方大ふ騒ぎ一家の男女狼狽さわぎ。四途路ふあつく乱れ さわ。拝巷の四面ふ猛ふどつと鯨の波おそあげくろうろれば。行竜ハ 佇く立上り。刀おつくろう三階あろ。障子とさつと押ひらき向と 佶と見渡せば。駿兵と見へく其人数へたくろふ知るよくあるれ ども。早家近くく責寄来つ。駿兵と配つくひしくと。玉樹屋と取 かこみ。行竜と生捕んと勢ひ雄くしくやきくれば。一家の 大勢四方へさつと逃のきくろう。亀大夫いさまと見く

大ひふいろつくく合図の笛と。二声三声吹くれば。出口々々ふ ひくくろう。駿兵の大勢むくぐう集り。只一名の行竜と。 十重廿重ふ拿かくく。吾打止んと揉ぐろうろう。這時 くも行竜ゞ。手下なる宇薙女へ。今紫它二郎ゞ駿 兵の大勢ふ囲まくくと。聽くくも。大ふ驚き。豫て准構 の下胴甲と。拿出くつ。身をひくくとめくもるひまも 荒女長刀ふ。くろう。晋街口へ駈來り。向ふと見まば駿 兵の大勢。むくぐう集るそゞ中へ。那長刀をうひ振く。 面もふくず切て入まば。行竜遥ふ是を見て。吾と援ふ 駈付くく。宇薙ふあくずやくく最危し。徳大勢行

そぶ中へ。伜一名切入〳〵と。吾とすく〳〵ふかたうや
あ〳〵ん。却て鈍や蛋虫の。火ふへようも猶危しもれ
まゝ伜ぶ援あ〳〵〳〵。箇程の敵と切出け得ざん
早く〳〵まつや引とれやと。罵り呼べど。宇蘿ハ毫も
聽入ず。尚もすん〳〵戦ふ〳〵。行竜ハ幼術りてくや
く逃去んと思へども。主客のいさかひ轉倒して。今
ハ宇蘿を援るべく。那必ず摘とならんべし。危ひうなと
獨りごち。四方ふ當つ〳〵戦へども。敵人ハ大勢ふ〳〵。這
方ハ僅両名ふすぎず。宇蘿ふ巴の勇あれども。憂ハ
衆ふ對〳〵がく〳〵。ひう摘とありふ〳〵。行竜是と

見るとも。今ハ援ふふそのよう〳〵あく。心のうちにあん
じく〳〵。又せんすべも後ふぞあらんと。思へやあり少と
ひるゞし。櫻の枝とひら〳〵と。猿の梢を傳ふゞ〳〵。
家の上ふ飛あゞり。四方と白眼ぐ立〳〵〳〵。影兵の
大勢是を見るとも。手ふ掌ふ能手あつ〳〵つ。准備
の梯子軒ふ打うけ。我も〳〵と拿のぐ〳〵。又四方より
取かこむ。登岩蛟倉行竜ハ刀と口ふひつくゝ掌を結
んぐ〳〵呪とかせば。不測や形ハ煙ぐ〳〵。消く〳〵跡あく失
ふ〳〵。影兵ぐもいあをと見て惘然とあるれ果是ハ
とばく〳〵ふ猿の梢と落〳〵ぐ〳〵。如鷺々々〳〵して目斗

たゝかひ。たゞ〳〵殺して立居たり。浮木亀太夫。大音
みて。那行竜ハ敵てどり。幻術あり〳〵と例〳〵ふ。今
さらにおどろ〳〵絆あらんや。紫宅二郎既ふ逃去られ
ぬ。尚這同類なる女賊を得たり。這奴と糺して盗
賊らぶ。宅類と問べ紫宅二郎が羽翼を絶の道理ゑ徐達早
く這女を。引立〳〵ハ帰らぎる早〳〵と罵り呼べ。夥兵共ハ
宇薙を引立打立々々行わ〳〵。既ふ其日も晩方ふ眼代許
へぞうろう。浮木亀太夫ハ眼代堅隅隠岐介ふ見へ具ふ言上
して曰く。小可今日聽命ふよりて。大勢の夥兵を引卒し。玉
樹屋を取かこ。賊子蛟倉紫宅二郎を。かり捕んと

いさせ〳〵呼。那藤〳〵噂ふ聞。左慈張道陵が妖術あり。忽地櫻の木と
傳ひ。家根の上ふ飛上り〳〵。隠形を以〳〵姿とかく〳〵。逃失ていん。
然れども這女ハ。即紫宅二郎が仝類ふ。那ふ力とそへ〳〵吾々ふ
手向せり。是ふよりて這女と忽地ふ引捕へ。生擒てりしあり。
只々紫宅二郎が夏ふおひ〳〵ハ。吾々が力ふ不及御憲断と賜りべ
と。遺もあり〳〵言上ふ〳〵〳〵べ。隠岐介打聞く。賊子既ふ逃去り
〳〵〳〵。そハ今更ふ云〳〵甲斐なし。只不敵なるハ其女。容貌健
ものふて。尋常の女ふあらず。女賊ふあらずして又何ぞと云ん。
那を堅厳〳〵鞫問せべ。賊情〳〵〳〵分るべし。夏忽ふ
〳〵〳〵て。その曛昏より廳を開けば。夥兵們ハ宇薙と牽出し

施幼術行龍脫重圍

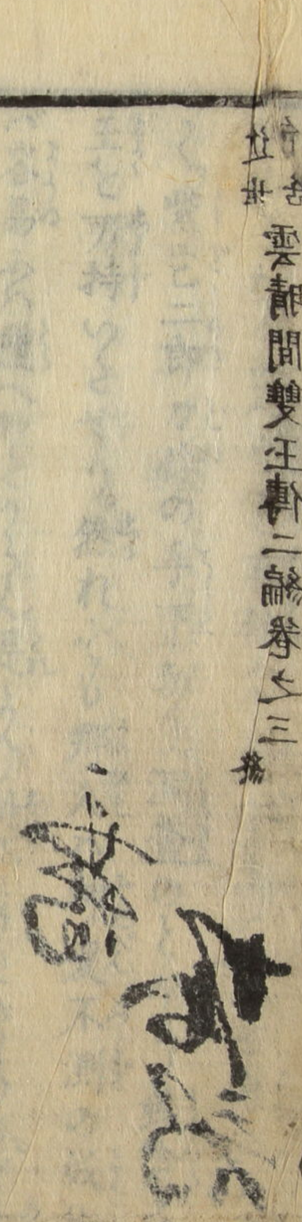
て。縁頼ちろ〳〵推居〳〵。當下堅隅隠岐介へやおき女と呼ふ介
らわ〳〵。支の頭末と鞫問ところふ。其為体髮の燈燭晃〳〵亭午の
ごと〳〵。明うるふ。獄兵ハ索と牽。獄卒ハ杖と揚て。紫它二郎ゞ一胴の
もの。那名玉と呼持せ〳〵ゝ在体ふヤ上よと。嚴威とあ〳〵そ〳〵
責〳〵ゝ〳〵。かゝ生ゝも賊宇雜ハ少〳〵も驚き〳〵ゝ氣色あく。
いふも那人ハ鮫倉紫它二郎行龍ゝて。播磨加東郡の人ゝ。
然生ゝも名玉と呼持せ〳〵や所持せゞゝや。登国ハさ〳〵に存ゞ
侍らず。尤那人近頃より賊ふ類せ〳〵呼行ハあるとゞ。そゞ胴一の
有支や。その義も吾淵決〳〵て存ぜず。其它の緯ハ尚以〳〵知ら
ゝりといふ謂もあ〳〵。且まゝと吾淵ハ上野の。白井ふ産せ〳〵者

て去々年より這地ふ上り。女按摩とつゝせ〳〵のゝ。別ふ子細も
ゝそぎと。いへゞ隠岐介声とゝり立おのゝ賊婦。你口の開〳〵ゝ。大胆
ある支とゝいふものゝな。你賊ふあゝぞんべ。何ゞゆへふ甲と著〳〵。
命と的ふ所縁もあゝと。紫它二郎と救ゝんとせ〳〵や。尋常
ゝ〳〵ハ白状せまゝじ。よゝふあゝそあれと。久厚ゞ下知〳〵あゝく
ひ獄卒。宇雜と地下ふ推伏ゝく一百あまゝも撲〳〵ゝる。
あゝれむゞ〳〵宇雜女ハ。背やゞき皮肉爛まゝく。忽地氣絶
〳〵ゝくゞれゞ。獄卒ハ杖と駐ゝ。引起〳〵水と吹被ゝふ且
〳〵生息出ゝる。隠岐介と見かゝ見ゝ女奴ゞ大胆ある。
一朝ふゝハ首状まゞゞくもあゝゞ。首言今宵ハ噴と止重

くきびしく鞫問をべしとて。獄卒ふヤ付。晝夜ハ獄舍へ遣ちつ。嚴ふ守らせつつ。不原その翌日隱岐介ハ。又宇籬女と召つ。やおれ女。うふ聽。徐昨日つるハ生ましく上野白井ハ。這地ふ上りて。按僚ともつつや。按僚が甲盛と所持しつ。何とすつや。かれべ紫它二郎と謀しつ合しつ。名玉と拿しふ疑ひあしと。敦圉悍く嘖れども。宇籬女ハ些とも恐まず。尚いひ解んとするわどふ。隱岐介いよいよ嗜りて。兵ども那奴が背と拗ぐ。首狀させよと焦燥バ。獄卒等ハ阿と應て又推伏さして背と撑支一百余りふ及びくれべ。宇籬女ハ霎時も得堪ず。忽地ふ息絶しうべ。獄卒ハ苛責と駐て。やおう引起して口中ふ藥とそそぎいれしうべ。且くして甦生せり。登嵜隱岐介ハ。徐ハ尋常ふ女ふ似げあり。不題大胆ある者ありかな。這期ふ及んでいかど包をかくすとも。大罪をくふ顯然くれバ。又たすうるべき首筋ハあり。然バあれど恁きびしく。嘖て實を吐すのぶ廳所の職あるべ。尚此上ふも手をつくし。責て首狀つさすべし。ちくいも迚ぬ徐ぶ命。縛恁々とヤあげ。苛責の苦痛とのぶれぶやとつべ宇籬ふ首と擡げ。吾首ようの命と弃て。打て出るる支あまべ死と恐まくて恁まくて。包をかくもふあるべし。今ハ和主ぶ利と推て首狀と

とも〳〵もるゝ人今ゞ有体ふやし上べし。いまも吾淋へ盗賊ふく。紫芒二郎カ徐の手下あり。洞査のゝあり蛟倉ふゝ。名王と所持いゝせり。然れども那人へ。神変不測の妖術あれば容易ふへ獲へがゝうん。是よう外ふまゝさゝうふや上べき支へあゝ〳〵。坂東そゞちの張炎〳〵。云放〳〵てぞつひ居〳〵隠岐介打〳〵ひ。いゝ〳〵も首状やゝうゝて。即時ふそゞ口書と拿。明日いよ〳〵千日の法場ふあひゝ。死罪ふまゝべきとゝ渡〳〵。登夜もきびゝ〳〵守りと付〳〵。獄舎へゝて遣〳〵ゝ。此時宇薙身ふ古き單衣と着せゝゝ。髪へ乱ゝ〳〵海和布のゞ〳〵。最あゝれあゝ風情あり。此時隣

の獄舎ふも。元原一個の罪人あゝあへ是漢子獄舎ふ〳〵て。壁一隅と界とせゝ。その夜真三更さゞるゝゝ。守りの者共酒ふ醉ゝ。耳くも寝入ゝゝれべ。隣の罪人ゝて〳〵と界の壁と壞ちゝ。よゝやく頭とさゝ入ゝ。やよ女中やよ女中と。悄々地ふ声をゞゝけゝゝる。畢竟あゝ何者あるやゝゝ第四の巻ふ説解ゝと聞ねゝ〳〵



一　文中ものと文中ものと

巻四の巻之雜部の関は何者をしらずして畢竟ものの所為なるべし。

一　文中ものと文中ものと

一人〳〵の文中ものと題して詩を酒を賦人〳〵の雜の罪人〳〵〳〵の果て

一　真三更ものゝ所為なるべし。若しこの者共

一　人もしくは人の罪人の個一原元。塾

一　人もしくは人の罪人の個一原元。塾